

揺れるやじろべえの重し

(げんゆう・そつきゆう) 1956年福島県三春町生まれ。著書に「中陰の花」(芥川賞)、「アブラクサスの祭」など。

作家・福聚寺住職 玄侑宗久さん

ものが奪われた」

玄侑宗久さんが住む福島県三春町は福島第1原子力発電所から45キロ。あらゆる業種が風評被害を受け、自殺者も少なくないという。

「放射能へのおびえ、リストラ、余震。生きる地盤そのものが揺れている。津波とは別種の災害がダメ押しし、底が見えない。放射能の問題がなければ、閉塞感はこちらほど強くない」

新たな共同体の芽

原発周辺の住民約400

「避難所には新たなコミュニティが生まれているのかもしれない。このコミュニティを生かす形で今後の住宅を造らないと、大変なことになる。避難民の声に耳を傾けてほしい」

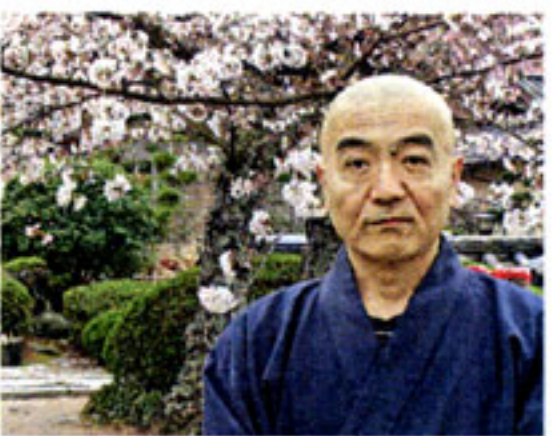
今は言葉を速く

玄侑さん自身も原発事故の発生当初は心が揺れたが、地震から6日目に寺に居続けると決意した。

「宝永の富士山大噴火のとき、住民が避難するなか、白隠禅師は本堂に坐禅して逃げなかった。天が自分を見捨てるのなら、自分もそこまでなのだ。だからここ

▽2

震災 ころ再生



福聚寺の桜は見事に咲いた (福島県三春町)

人が三春に避難している。くのか。町民意識は風土が「生まれ育った町から避 与えてくれる。春の祭りや難しなきいと言われる。分 秋の収穫。そんな風土その

散居住を強いられない不幸のどん底で、新しい芽生えもあるという。 「三春町の避難所でのアンケートで、仮設住宅ができて申し込まないと答えた人が25%もいた。そのまま避難所になりたいという人が31%。炊事当番、掃除当番などを決めての共同生活で、悩みを共有し、仲間意識をもっている。仕事はないが、みんなであれば何とかなるといふ気分がある」

にいと。白隠は自分が残 が都市の人とは異なる」

「これは人災だ。どうし ていくのか逐一検討しているよ、ということ、揺 かなくはない。前例 にとらわれていてはダメ だ。何もかも奪われてどん

「放射能騒ぎの渦中でも、底で暮らす人々に、総理は 東北の人はお彼岸の墓掃除 希望をかかげてほしい」

震災直後から積極的に発 言を続け、国の復興構想会 議でも直言している。

「今は言葉が直接現実

に 働きかけ、現実が動く。な らばとりあえず、そうすべ きだろう。熟成させた文学 的言葉は、読者の深くまで 届くと思う。だが今は速や